

———猿払村の昔、そして現在のみどころ———

猿払村の歴史的な事項と現在の観光スポットを猿払村のホームページから紹介していきます。歴史と自然がいっぱいのところです。

猿払電話中継所跡

北海道と樺太間の電話通信は、海底ケーブルでつないでいました。昭和9～39年の30年間、猿払村浜猿払は陸揚地の中継地点でした。直線距離では稚内市の方が近いですが、潮の流れなどで猿払村浜猿払が中継地点に選ばれたようです。第二次世界大戦敗戦後、昭和20年8月20日の真岡事件の際、猿払電話中継所では自決した真岡郵便局の電話交換手の最後のメッセージを受信しました。亡くなった電話交換手の鎮魂と、電気通信の功績を後世に伝えています。

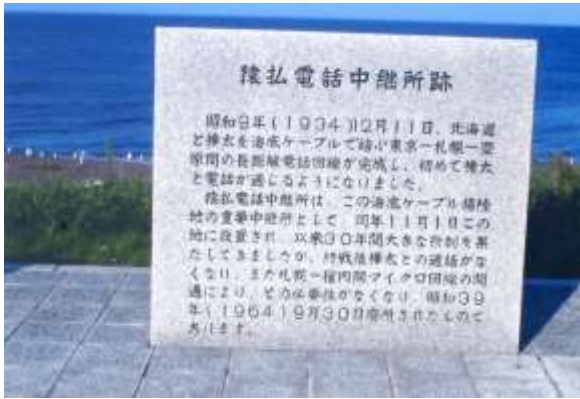


このマンホールから樺太へケーブルが伸びていました



海底ケーブルが残っています

番号	ケーブル名	線種	線長 (km)	布設年月日
1	宗谷海峡線2号	40ヶ線鋼絞線	94.174	1943年11月
2	・ 電信1号	1ヶ線鋼絞線	105.895	1921年10月
3	・ 電信2号	1ヶ線鋼絞線	99.751	1943年6月
4	・ 電信3号	1ヶ線鋼絞線	85.820	1943年11月
	・ 電信4号	1ヶ線鋼絞線	87.882	1934年9月



昭和9年(1934年)12月11日、北海道と樺太を海底ケーブルで結ぶ東京—札幌—豊原間の長距離電話回線が完成し、初めて樺太と電話が通じるようになりました。

猿払電話中継所は、この海底ケーブル揚陸地の重要中継所として、同11月1日この地に設置され、以来30年間大きな役割を果たしてきましたが、終戦後樺太との通話がなくなり、また札幌—稚内間マイクロ回線の開通により、その必要がなくなり、昭和39年(1964年)9月30日廃所されたものであります。



皆さん
これが最後です
さようなら
さようなら

昭和二十年八月十五日終戦、それから五日後の昭和二十年八月二十日ソ連軍が樺太(サハリン)真岡上陸を開始しようとした。そのとき突如日本軍との間に戦いが始まった。

この日の電話交換手である九人の乙女達は窓越しに見る砲弾の炸裂、戦火と化した真岡の街、刻々と迫る身の危険、もうこれまでと決断、死の交換台に向かい「皆さん これが最後です さよなら さよなら」の言葉を残し夢多き尊い花の命を絶ち職に殉じた、この思いを繋いのが当時電気通信の拠点として重要な役割を果たしていた「猿払電話中継所」なのです。

私達は猿払ライオンズクラブ設立二十周年記念に当り、殉職した九人の乙女の霊を慰め、また電気通信ゆかりの地に電気通信の功績を顕彰すると共に世界の恒久平和を祈り、この碑を建立する。

平成十八年十二月十日

猿払ライオンズクラブ 二十一代会長 鳥谷部 徹雄

寄贈 猿払ライオンズクラブ

平成21年7月6日 枝幸町中央コミュニティセンターにて「地域づくり推進会議 in 宗谷」が開催された。

「宗谷」のめざす姿 ～広大な大地と恵まれた資源を生かした産業が展開し、豊かで安心して暮らせる地域～というテーマであった。

宗谷地区からは稚内市長、浜頓別町長、中頓別町長、枝幸町長、豊富町長、礼文町長、利尻町長、利尻富士町長、そして猿払村長の 森 和 正氏、北海道庁からは高橋はるみ知事、忠嶋 隆 宗谷支庁長が出席した。

将来のあるべき宗谷の姿、宗谷ならではの地域特性を背景とした産業振興と、将来にわたって安心して暮らせる地域を地域住民と行政が一体となって実現するためというものであった。その中で森村長は猿払電話中継所に関して発言されているので紹介します。

「サハリンの真岡（現ホルムスク）の郵便局、日本が占領していた当時ですが、この真岡郵便局からアニワ湾を伝わって猿払村の浜猿払というところに、電気通信の海底ケーブルが揚がっています。そういう関係で太い同軸ケーブルが5本揚がっていて、そこに電電公社の施設があったわけでありまして、そこから札幌に向けて発信されて、全国に事が発信されてということになっていました。

その部分を、第1次産業とは別に、観光にして良いのかどうかということは非常にいろいろな問題もあるかとは思いますが、私は観光の名所という形にしていきたいと思っていますところです。まだまだ第1次産業と絡んだ形の中での観光産業の掘り起こしがやはり必要ではないかと。

そういうことで、地域の人たちが恵まれた形の中で、安心して暮らしていけるような状況をつくっていかねばならない、このような感じを思っているところです。」

高橋はるみ知事は「猿払村長からは、観光をはじめとする地域資源おこし、眠っている産業おこしについてお話がありました。海底ケーブルもお話もありましたが、またそういったことについて、時間があれば具体的なお話をいただければ、そこから更に議論を進めていきたいと思えます。」と発言されています。

現地を訪れて分かったことですが、稚内公園にある「9人の乙女の像」は真岡事件の慰霊の為に建てられたものと聞いていましたが、猿払が海底ケーブルの揚陸地であることは知らない方が多いのではないのでしょうか、浜猿払の「猿払電話中継所跡」の記念碑を見て「皆さん、さよなら…」と聞こえてくる気がして胸の熱くなる思いがしました。

北海道北部を観光する人にも是非、訪れて欲しい場所です。

いさりの碑

猿払公園より国道 238 号線をはさみ海側にあります。

猿払村ではニシンやホタテを乱獲し、漁業経営を衰退させてしまった過去を持ちます。猿払の海を拓いた多くの先人の苦労と偉業を偲び、建てられたのが「いさりの碑」です。



いさりの碑

帆立貝漁場造成事業十周年に当り猿払の漁業のうつりかわりを振り返って見る

我々の先人がオホーツクの海の魚貝類に生活の糧を求めたのは明治の始め頃のことだ

それから一世紀になんなんとしている 春 四月五日 鯨の群来で海は乳白色になり獲

つても獲つてもなくならないものと思われた

鯨は海の荒くれ男と力比べをするように網もさけよとばかり乗網した

海扇と呼ばれた帆立貝は海の底に幾層にも重なり合っているのではないかと錯覚を起こ

させる位生棲していた

しかし之等の生物の運命も貪欲な人間の前には所詮は滅亡の運命が待ち受けていた

今日ではあらゆる資源は有限であることが認識されている

しかし生物資源は自然と人間の適正な育成管理によつて永續させることが出来る筈だ

私達も自然の摂理になつた生物資源の育成管理を科学的調査と人智をあつめてやつて

みた

春夏秋冬 自然の摂理は一世紀の昔も今も変わりなく繰返され生物の生命力は見事に部

族と子族の繁栄に其の力強さを見せてくれた

今 オホーツクの海は先人の開拓した時のように帆立貝が見事に結実してたわわな実を

見せている

鯨もまた間もなくふ化事業の結実を見せようとしている

猿払の海を拓いた多くの先人の苦労と偉業を偲び其の意志を我々も子孫もうけつぎそし

て実践することを肝に銘じ今此の碑を建てる

人間は神々と力を競うべきでない

人間は自然の摂理に従うべきだ

昭和五十六年十一月二十二日

猿払村漁業協同組合

インディギルカ号と日ロ友好資料室

猿払公園より国道 238 号線をはさみ海側で、「いさりの碑」の宗谷側にあります。



昭和 14 年（1939 年）12 月 12 日夜中、吹雪と時化の猿払村浜鬼志別沖 1 キロの地点（道の駅さるふつ公園海側から臨むことができる）で海難事故が発生しました。

視界も悪かったのでしょう。波が高く、舵もきかなかったのかもしれませんが、1,125 人を乗せカムチャッカからウラジオストクへ向け航海していたソビエト連邦（現ロシア）の貨物船が座礁してしまいました。救援を求め船員が浜鬼志別にたどり着き、事故が発覚しました。村内、村外に連絡が廻り夜が明ける頃には、救助と御遺体の収容が始まりました。村の漁師もインディギルカ号に救援に漁船を出しましたが、猛烈な時化は、救助の船すら沈めました。その後、大型の救助船が現地に入り活動を開始、430 人が助けられたといえます。しかし 700 人以上の人が寒さや溺れて命を失っていったのです。真っ暗な中、冷たい風に吹かれ、高い波にのまれそうになりながら、異国の地でどれだけの恐怖心にとらわれたのでしょうか？当時は第二次世界大戦中、ソ連と日本の間には緊張状態が走っていました。停戦協定が結ばれていたとはいえ、敵国の領土内を航海することだけでも危険な行為だったでしょう。仲間が目の前で衰弱して、命を失う様を見てどれだけショックを受けたことでしょうか。それは救援を行った猿払村民にしても同じでしょう。身を切るような風の吹く中、深い雪の積もった浜で亡骸を収容する恐怖心、作業しても作業してもまだ行方不明だった方が絶命して打ちあがる現実、無力感や絶望感、敵国の民であるという気持ち。それはどれほどのものか体験していない私たちにとって想像の域を超えないですが、そんな状況下で生き残った方々と救助と収容を行った先人たちへの敬意を表します。戦時下で敵国の人々であったため猿払村へは上陸せず、小樽港へ向かいました。茶毘に付された遺骨も 12 月下旬には小樽を経由し、母国へ帰って行きました。昭和 30 年代には慰霊碑建立の声もあがり、実現されたのは昭和 46 年 10 月でした。インディギルカ号のモニュメントですが、「台座の石は船、座上の群像は国際親善と海難防止の願いを込めて手を取り合う 3 人の人、真ん中の球体は人々の強い心のきずな」を表しています。海難事故の慰霊祭は今も、毎年夏に行われています。海難事故やその後の交流の軌跡は道の駅管理棟 2 階の日

ロ友好資料室で見ることができます。

道の駅管理棟

道の駅さるふつ公園の駅舎となっている「管理棟」は、道の駅グッズの販売やキャンプ場の受付、パークゴルフ場の用具の貸し出しも行なっています。

また、「管理棟」に併設して、平成20年4月に売店がオープンしました。ソフトクリームやさるふつ産のほたてを使った軽食などを気軽に楽しむことができます



パークゴルフ場

パークゴルフは、男女問わず子供からお年よりまで幅広く、気軽に楽しめるスポーツです。

さるふつ公園にあるパークゴルフ場は、平成19年に36ホールに増設され、存分にプレーが楽しめます。

自然に囲まれて太陽の光をいっぱい受けながら広々としたコースをまわると運動不足解消と健康増進につながります。



風雪の塔・農業資料館

風雪の塔」は、本村の基幹産業である酪農において、生乳生産量が村内全体で年間2万トン、戸当たり平均2百トンを突破したことを記念して、昭和59年に建設されました。



また、同時に建設された「農業資料館」には、開拓当時の人々の暮らしぶりが一目でわかる生活用品、農機具等が展示されており、先人達が乗り越えてきた道のりの険しさや厳しい自然条件をうかがい知ることができる貴重な資料館となっています。

異国の雰囲気を漂わせる両建物は、さるふつ公園のシンボリック的存在となっており、夜間にライトアップされる期間には、訪れる人々にとって絶好の記念撮影スポットとなっています。

猿払村営牧場

「猿払村営牧場」は、オホーツク海に面したさるふつ公園をとり囲むように位置し、およそ410haと広大な面積を有しています。

村内酪農家の経営補完施設として設立された本牧場では、春から秋にかけて、陽光ふりそそぐ緑の大地でのんびりと草を喰む牛たちを木柵越しに見ることができます。

また、この地は映画「人間の条件」のロケに使われた歴史があります。



浅茅第二飛行場後

猿払には第二次世界大戦当時、対ソビエト、千島・カムチャツカ防衛を目的とした陸軍の専用飛行場として建設された。猿払村の南端浅茅野地区から浜頓別町にかけての浅茅野台地に第1飛行場が建設され、そこから30km北の猿払村浜鬼志別に第2飛行場が建設された。1944年の工事完成には約3年の歳月を費やしたが、程なくして日本は終戦を迎えたため、殆ど使用実績がないままその役目を終えている。

現在、第1飛行場の大部分は牧草地となり、旧JR天北線飛行場前駅や滑走路脇の掩体壕跡が確認できるのみである。第2飛行場は旧滑走路端に現在、道の駅さるふつ公園が建っており、滑走路部分も村営牧場となっている。

工事にあたっては、受注した鉄道工業から旭川市の丹野組に土木工事全般が下請けされ、川口組は付帯施設の建築工事を担当した。川口組の下請には稚内市の坂本建設、本多建設、松本組、坂本組などの業者が関わった。

鉄道工業、丹野組、川口組は、ともに工期の早さで知られており、その内実はタコ部屋労働と多数の朝鮮人、中国人を強制的に使役（強制連行）した旧態依然とした経営にあったといわれる。また、宇都宮刑務所の囚人も兵舎建築に動員されていた。他に学徒勤労奉仕、地域住民の勤労報国隊などが動員され、工事にあつたと記録にある。学徒勤労奉仕には測量のため日本大学工学部の学生、旭川工業学校の生徒などが動員された。

朝鮮人労働者は証言から500名余が動員されたと思われ、タコ部屋同然の朝鮮人部屋に拘禁され、労働に従事させられた。冬期間も続けられた工事では、その苛酷な労働により犠牲者が出ている。タコ部屋や朝鮮人部屋では不衛生な環境から発疹チフスが流行し、結果として120名以上の死者を出している（出典：wikipedia 浅茅野飛行場）

（<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%85%E8%8C%85%E9%87%8E%E9%A3%9B%E8%A1%8C%E5%A0%B4>）

滑走路長1,600×200mで板敷であった。

ここにも戦争で傷つけられた過去があつたのが、現在は牛が放牧され牧草が辺りを覆い尽くしてしまったので、滑走路後は見ることが出来ません。

当時を知る人に聞いたことですが。

昭和20年8月15日に1機の飛行機が猿払飛行場の滑走路に着陸しました。

そのとき漁をしていたのですが、飛行機が海上を低空で通過したので、電線に引っかかるのではないかと思ったそうです。

また、奥さんは釜で貝を茹でる作業をしていました、飛行機が着陸したので滑走路まで見に行ったのですが、玉音放送があるのでその場をあとにしたそうです。

後で分かったことですが、浅茅野第一飛行場を飛び立った飛行機がエンジントラブルで猿払飛行場（第2浅茅野飛行場）に不時着したものであったそうです。

〜自然体感スポット〜

ポロ沼

本村の数ある沼のなかで最も大きく、国道238号線からもその姿を眺めることができる沼で、夕日に染まる水面の美しさが格別です。

11月には白鳥がシベリアから飛来し、しばしの間羽を休めることから、その優雅な姿を目にすることができます。

その後白鳥は南下の旅を続けますが、越冬期を過ぎた4月頃には、北の大地に春の訪れを告げんと再びこの沼で羽を休めます。

冬には凍りついた沼に穴をあけ、チカ釣りを楽しむことができます。



カムイト沼

アイヌ語で神々が住む沼という意味のこの沼は、悠久の年月の出来事を語りかける原生林に囲まれた、静謐と神秘をまとった沼です。

水の神、森の神、風の神、あなたは、はるか昔からこの沼に住む神々の気配を感じることができるでしょうか



モケウニ沼

北オホーツク道立自然公園・鳥獣保護区に指定され、雄大な牧場地帯に囲まれたモケウニ沼には、可憐な花々や湿地性植物が多く散在しており、夏には遊歩道からその自然のお花畑を眺めることができます。

この沼は、約 6,000 年前の縄文時代以降の海退によって成立した海跡湖であり、モケウニ沼・小沼・第1沼と3つに分かれています。

ちなみに、モケウニとは、アイヌ語で枯れ木のある沼という意味です



王子の森-猿払

面積約 1400ha の「王子の森 - 猿払」は、(株)王子製紙の社有林ですが、研究教育文化創造の場として遊歩道なども整備され、一般に開放されています。

この一体の湿原は、約 6,000 年前の縄文時代以降の海退によって成立した海跡湖とその周辺が陸化して生じた湿地帯です。

オホーツク海沿岸でもっとも規模の大きなミズゴケ群落とアカエゾマツ湿地林が発達しており、学術的価値が高く貴重な湿原です。



エサヌカ原生花園

エゾカンゾウ、ハマナス、ワタスゲ、コケモモなど数十種類もの花が色とりどりに咲き乱れるとともに、貴重な高山植物なども目にすることができます。

6月下旬から7月中旬にかけてが花の見頃になっています。探索によっては意外な植物の発見も・・・



あとがき

私は平成元年から平成 8 年まで内灘町民でしたが、その後、白山市（旧松任市）に転居しました。

平成 11 年 11 月に愛媛県五十崎の凧揚げで「さるふつ凧の会会長」の越智良九ご夫妻と出会い、意気投合しました。翌平成 12 年（2000 年）7 月には猿払の凧揚げ大会に参加しました。平成 13 年（2001 年）5 月には猿払村役場職員だった長谷川憲男さんご夫婦と越智良九会長ご夫婦が内灘の「世界の凧の祭典」に参加し、当時の岩本秀雄町長に越智さんの両親が内灘出身であると紹介したところ、大変驚かれたことを覚えています。

その後、越智会長とは親交を深めてきました。平成 22 年（2010 年）の 7 月と 9 月に猿払を訪れました。内灘町史より内灘から猿払へホタテ漁にきて猿払に移住した人達が大勢いることを知り、当時の厳しい貝曳漁の記録、昭和 39 年にはホタテ漁を禁漁とし、資源が枯渇した中での資源再生への人々の苦勞と努力の記録を読み感動を覚えました。

いさりの碑文に「人間は神々と力を競うべきでない。人間は自然の摂理に従うべきだ」という言葉がこの地にはふさわしいと思えるようになりました。そして内灘と猿払のつながりを記録として残したいとも思いました。

本年平成 25 年が猿払村開村 90 周年の節目となる記念すべき年に記録を残すためにご協力いただいた内灘町教育委員会、内灘町からの移住者に対して相談にのって頂いた中川達内灘町町議会議員、猿払村財政企画課からは貴重な情報を頂きました。

また異 昭猿払村村長には「よみがえった海」の冊子を頂戴し、今回冊子の中から記録として残すことが出来感謝申し上げます。

今後とも内灘町と猿払村が人と、物を通じた交流が継続していくことを期待いたします。

参考文献

内灘町史、金沢市史、内灘町ホームページ

内灘郷土史（中山又次郎著）、北国新聞（明治 40 年 8 月 27 日）

猿払村史、猿払村ホームページ、宗谷総合振興局ホームページ

三省堂辞典、WEB:wikipedia 出典より

「氷見地域の和船とその建造技術」（氷見市立博物館 廣瀬直樹著書）

「よみがえった海」前田保仁著書

「波上の館」津本陽著書 中央公論社発行

「石川県の歴史」下出積與著首 山川出版社

「図説 石川県の歴史」河出書房新社

平成 25 年 2 月
花 木 幹 史